

「湖北地域における集落立地の変遷」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 酒井, 康介 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/2842

研究ノート

「湖北地域における集落立地の変遷」

酒井 康介(大学院文学研究科)

1. はじめに

近江盆地を湖北地域など7つの小地域に区分して集落立地の変遷を比較した場合、弥生時代 期～ 期・弥生時代 期または 期・古墳時代後期という3つの時期に、大きな画期を見いだすことができる。また、愛知川以南の地域では、弥生時代 期に見られる画期が、それ以北では 期にまでずれ込むという状況も見られた。

しかし、各地域内においても、ある程度の格差が存在するものと思われる。そこで本稿では、湖北地域を河川流域を基本とした3地域(図1)に細分して比較を行い、同地域内における集落立地の変遷を考えたい。山東町・伊吹町の4遺跡は、いずれの地域の遺跡群からも距離があるため今回の分析では扱わない。

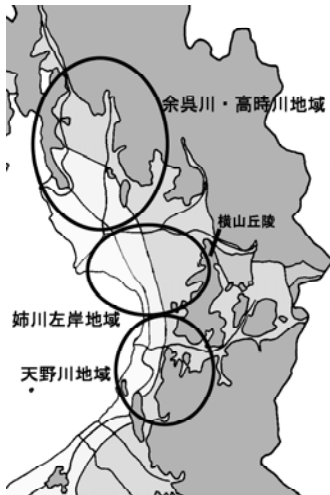


図1 小地域の範囲

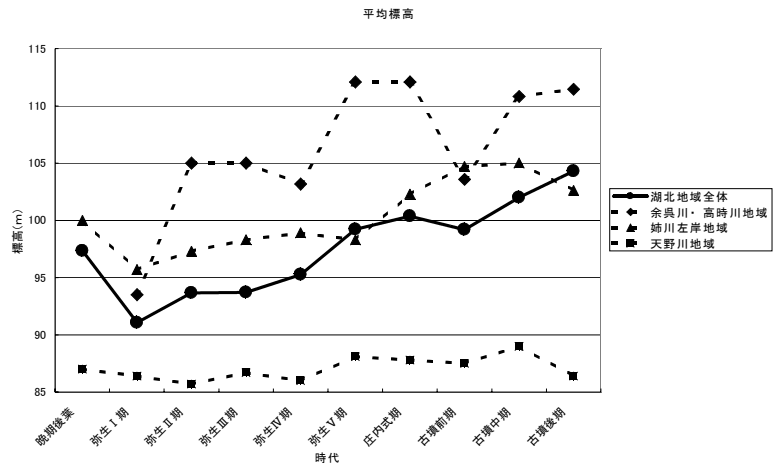


図2 平均標高の推移

2. 湖北地域全体 (遺跡数:84)

各地域の分析を進める前に、湖北地域全体の状況を見ていくこととする。

集落立地変遷の第一の画期として弥生時代期があげられ、集落立地の低地化が進行する。平均標高は前段階と比べて6m以上も低下している。三角州帯に立地する遺跡の割合も20%近く上昇する。第二の画期としてあげられるのは弥生時代期であり、新たな集落が多数自然堤防帯上に出現する。その結果、平均標高は約4m上昇する。こうして出現した集落は庄内式併行期に拡大し、扇状地帯に立地する集落の割合も増加する。第三の画期として、古墳時代中期・後期があげられる。扇状地帯の本格的な開発が進行した時代と思われ、平均標高は中期で約3m・後期で約2m上昇し、扇状地帯に立地する遺跡の割合も、中期で4%・後期で2%の増加を示している。

3. 余呉川・高時川地域 (遺跡数:22)

まず、余呉川・高時川地域の状況を見ていく。同地域では、縄文時代晩期の明確な遺跡が存在しないため、湖北地域全体の状況に見られるような第一の画期は見られない。第二の画期に対応する遺跡動向は、弥生時代期に見られる。遺跡数・住居数ともに急増し、平均標高も約10m上昇する。その後、庄内式併行期にかけて住居数の増加は継続する。しかし集落立地は、弥生時代期～庄内式併行期にかけて自然堤防帯以下の割合が増加している。つまり扇状地帯に立地していた集落が、周囲の地形帯へと拡散していく段階として捉えることができる。第三の画期に対応する変化は、明確には求められない。

4. 姉川左岸地域 (遺跡数:36)

姉川左岸地域として扱ったのは、現在の長浜市域に対応する遺跡である。同地域における第一の画期に対応する動きは、弥生時代期に求められる。平均標高は約4m低下するとともに、三角州帯の割合も増加する。第二の画期に対応する動きは、庄内式併行期に求められる。弥生時代期の段階で遺跡数の増加は見られる。しかし、住居数・平均標高の面では、明確な変化は見られない。住居数が急増し、平均標高が約4m上昇するのは、庄内式併行期に入ってからである。この時代になると、三角州帯に立地する遺跡の割合が低下し、それに代わって扇状地帯の割合が増加する。また拠点的な集落である鴨田遺跡と大塚遺跡がともに最盛期を迎える。こうした状況から考えて、庄内式併行期は、弥生・古墳時代を通してもっとも集落の活動が活発化した時代といえるのではなかろうか。第三の画期に対応する動きは、古墳時代後期に見られる。この時代、遺跡立地の面からは明確な変化は見いだせない。しかし、一時期沈静化していた遺跡数、住居数などは再び増加を開始している。こうした状況から考え、この時代に集落活動が再び活性化した状況が見て取れる。

5. 天野川地域 (遺跡数:22)

同地域は、姉川左岸地域と地形的に隔てるものがなく、密接な関係を持つ地域である。しかしここでは別の地域として扱うこととする。その理由として、この地域は息長古墳群を築造する地域であり、横山丘陵上に古墳群を形成する姉川左岸地域とは、政治的に異なった地域を形成したものと考えたからである。

第一の画期に対応する動きは、弥生時代～期に求められる。平均標高は約1mずつ低下し、集落立地も三角州帯の割合が増加していく。第二の画期に対応する動きは、弥生時代～期に求めることができる。平均標高は2m上昇し、三角州帯の割合も約30%減少する。天野川地域内には、扇状地帯がほとんど存在せず、他地域と状況がやや異なるが、三角州帯から自然堤防帯への移動という変遷は見取れる。第三の画期に対応する動きは特に見いだせない。同地域においては、弥生時代期以降再び遺跡の低地化が進行し、古墳時代後期までこのような傾向が続く。

6.まとめ

湖北地域全体の状況と、三つの地域の状況を概観してきた。その結果、以下のような状況が見取れた。まず、第一の画期とした集落立地の低地化は、縄文時代晩期の状況が不明瞭な余呉川・高時川地域を除き各地域で見ることができた。第二の画期とした集落立地上昇は、すべての地域において見ることができた。しかし、姉川左岸地域では庄内式併行期まで下がるのに対して、他の二地域は弥生時代～期に求められる。しかし、余呉川・高時川地域においても住居数の画期は、庄内式併行期にも求めることができる。これらの状況から、姉川左岸地域、余呉川・高時川地域において扇状地帯の集落が本格的に活動を開始した時代として、庄内式併行期を捉えることができるのではなかろうか。

また余呉川・高時川地域では、弥生時代期以降、扇状地帯から自然堤防帯などに集落の分布域が拡大している。また天野川地域においても、弥生時代～期以降、自然堤防帯の割合が減少し、三角州帯の割合が増加している。これらの状況から、必ずしも低地から高地へと生活域が拡大していったわけではないことがわかる。

このように湖北地域内でも、多様な集落立地の変遷が見られる。湖北地域における鉄器の導入時期についても、湖北地域全体からは弥生時代～期に求められるが、地域を細分化して考えた場合、庄内式併行期まで下がる可能性も否定できないと思われた。

参考文献

- 滋賀県教委 1996『平成7年度 滋賀県遺跡地図』
辰己勝 1989「琵琶湖東岸の平野地形の特徴と光相寺遺跡

周辺の地形」『中主町文化財調査報告書 第19集 昭和63年度中主町内遺跡分布調査()概要報告書』

松室孝樹 2000「近江・湖北地域における弥生時代集落の様相 - 中期から後期を中心に - 」『みずほ』第33号 大和弥生文化の会

松室孝樹 1998「姉川左岸地域における遺跡の動態」『滋賀考古』第19号 滋賀考古学研究会